Ⅰ　学校の概要

個を活かす協働的な学びの推進モデル校事業　　綾川町立滝宮小学校

◆児童生徒数及び教員数

〇児童数

第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	特別支援	全　校
３学級 ６５名	２学級 ４６名	２学級 ６７名	２学級 ５１名	２学級 ５５名	２学級 ５９名	３学級 １１名	１６学級 ３５４名

〇教員数　　２５名

◆学校の特色

本校は、綾川町の中心部に位置し、古くから教育に熱心な地域である。昨今の地域の開発により校区には新しい住宅地が広がり、子どもの教育・しつけに関する多様化が見られ、基本的生活習慣や学習習慣を確実に身に付けられるよう個別最適化された学びが求められている。

本校の教育目標は、「よく遊び、よく学び、よく働く子どもの育成―つながり　分かち合い　自立を育む―」である。この教育目標を受け、昨年度より、「話す力」「伝える力」「きく力」の３つの児童のコミュニケーション力に着目し、取り組みを進めている。

Ⅱ　研究主題等

研究主題　　**つながり分かち合う喜びを通して 児童の自立を促す授業づくり（２年次）**
－　「きく力」の育成　－

◆研究主題設定の理由

現代社会を、主体的・創造的に生き抜くために、教育に求められているものは、「知」「徳」「体」のバランスがとれた「生きる力」を育むことである。中教審答申を受け、香川県教育委員会からは、「香川の新しい指導体制の在り方」の中で、「個を活かす協働的な学び」の重要性が示された。その実現に向け、「話す力」「伝える力」が重要なのは多くの人が実感している。しかし、同じくらい重要なのが「きく力」である。本校でも、自分の思いや考えを伝えられなかったり、「わかる・できる実感」を十分に味わえず、集団の中で友達と仲良く学び合うことが難しいと感じていたりする児童が少なくはない。県学習状況調査・児童質問紙における「きく」ことに関する項目で、肯定的な回答について一昨年よりも伸びが見られたが、県平均を下回っていることからも、「きく力」に課題があるといえる。「きく力」は、相手の理解の様子を把握しながら伝えることや、論点を吟味しながら話すことを支えることから、「きく力」の教育的波及効果を期待して、本研究主題を設定し、児童の自立を促す授業づくりを進めたいと考えた。

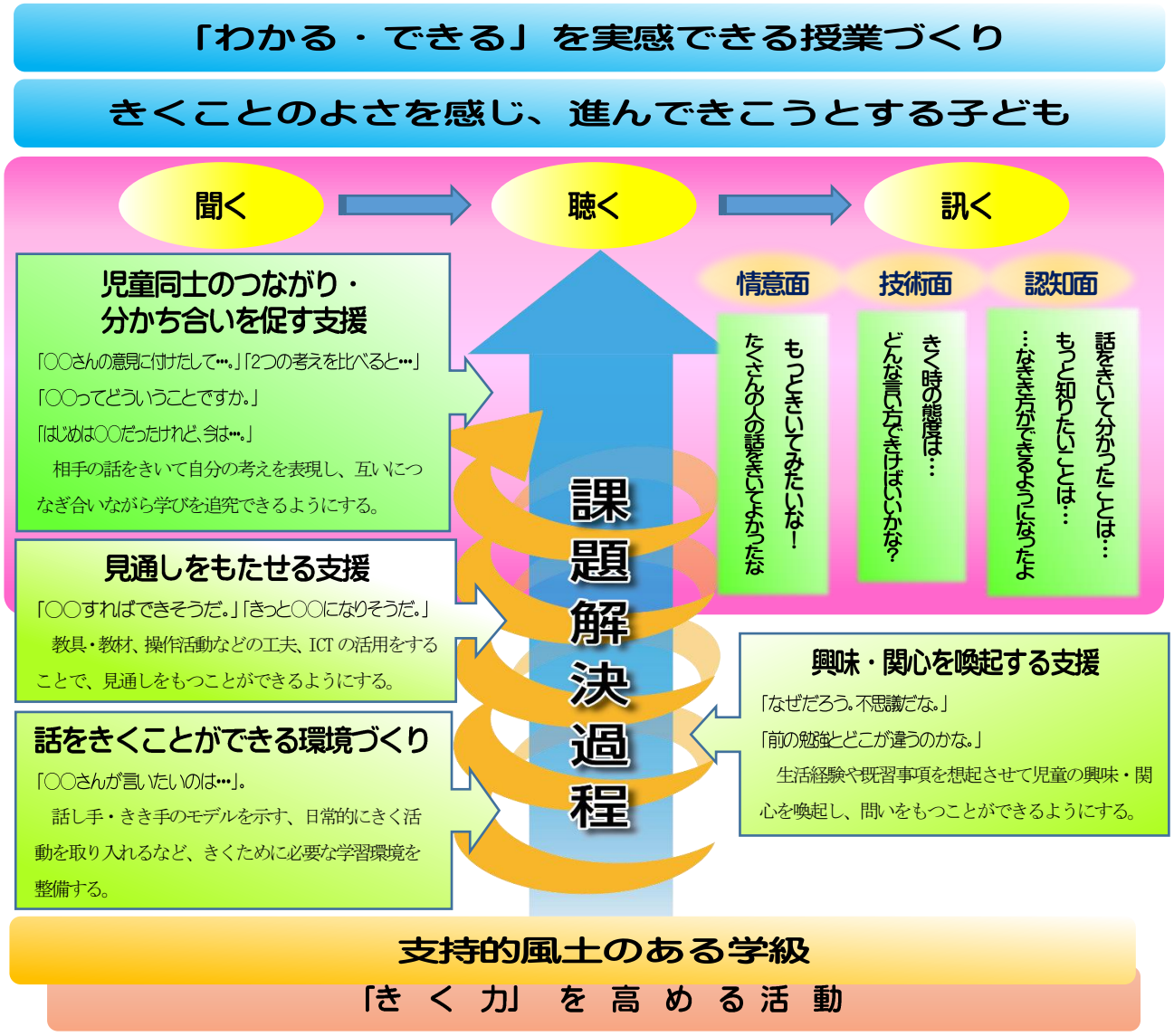
◆研究内容及び方法

（１）　研究仮説

> 「興味・関心」「見通し」「つながり・分かち合い」「環境づくり」の４つの支援を充実させることは、「きく力」を高め、「わかる・できる」を実感できる児童を育成することにつながるだろう。

本校では「きく力」を「聞く」「聴く」「訊く」の３つの段階に分け、きくことのよさを感じ、進んできこうとする児童の姿を目指す。話し手と能動的に関わり、相互理解を深めながらさらに新たな考えを生み出すことができることこそ、個を活かす協働的な学びであると捉えている。「きく力」を高めるため、学習指導において、「興味・関心を喚起する支援」「見通しをもたせる支援」「児童同士のつながり・分かち合いを促す支援（本年度の重点）」「話をきくことができる環境づくり」の４つの支援の充実を図る。

◆本年度の研究構想図



◆３つの「きく」

○　聞くー（　hear　）ー（　一方向　）

「聞く」は、誰もが日常的に行っている一般的なきき方。意識していなくても、自分の関心ごとであればきくことができる。正確に情報を受け取ったり、考えを深めたりするのに不十分である。

○　聴くー（　listen　）ー（　半双方向　）

「聴く」は、話し手の真意（話の内容・気持ち）を正確に受け取ろうとするきき方（傾聴）。話し手との良好な人間関係を築くことができる。

○　訊くー（　ask　）ー（　双方向　）

「訊く」は、質問や問いかけを行いながら深い意味や背景を探っていくきき方。話し手と能動的に関わっていくことで、より多くの情報を得ることができ相互理解が深まる。さらに新たな考えを生み出すこともできる。

（2）　研究の進め方

低・中・高学年から成る「学習指導三部会」を設置する。指導案検討や授業の準備・部会内での授業実践、指導案修正後、全体での事前検討（模擬授業形式）・研究授業・まとめを行う。部会全員で授業づくりを進め、深まりのある研究授業にするとともに、各学級の授業改善に生かす。授業討議では、きく力や理解などから抽出児を設定し、どのような「児童同士のつながり・分かち合いを促す支援」が「きく力」を高め、児童が「わかる・できる」を実感することに有効であったか討議する。また、その授業で見られた成果を次の研究授業に生かしたり、課題となったことを解決したりするよう、連続性のある実践を行うようにする。

Ⅲ　研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

１（児童質問紙）　授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいますか。

指標　　「①取り組んでいる＋②どちらかと言えば取り組んでいる」の合計

５月調査 87.9%　→　目標値 90.0%　→　11 月調査 91.9%

指標の達成に向けた実践

（１）児童の興味・関心を喚起する支援の工夫

「きく力」を育てる上で大切なことの一つが、児童がききたいと思うことである。それには、「違いを見える化する」ことが有効であると考える。そうすることで、既習の学習内容とのずれや、互いの意見や考え方の違いが捉えやすくなる。違いを捉えることができれば、児童はその背景を探ろうとし、友達の考えをききたくなる。

実践１　前時との違いに気付く動作化（第１学年　算数科「たしざん（１）」）

合併と同じ数値の増加の問題文を提示し、場面を動作化する活動を取り入れた。同じ３＋４でも、「３匹いて４匹増えたとき」と、「３匹と４匹を合わせたとき」では動きが変わる。問題文を読むだけでなく動作化することで、「同じ数なのに、前の勉強と動きが違うのはどうしてだろう」と課題意識が高まり、追求を通して増加と合併についての理解の深まりにつながった。

実践２　スケールチャートで立場を明確化（第５学年　道徳科「落とし物」）

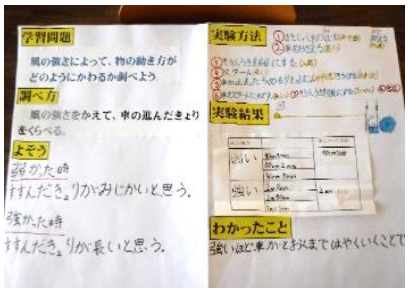
もし自分だったらどうするかをスケールチャート上に示させ、考えを可視化した。それぞれの立場を明確にし、自分と違う立場の友達がそう考えた理由をきいてみたい、と感じられるようにした。同じ立場の友達でも、そう考えた理由が違う場合があることにも気付き、興味・関心をもって交流し、多面的な見方の広がりへとつながった。

（２）児童に見通しをもたせる支援の工夫

見通しには、学習内容の見通しと学習方法の見通しがある。学習内容の見通しをもたせるためには、自分の考えをつくる時間をしっかりとることが重要である。また、学習方法の見通しをもたせるためには、学習活動やワークシートのパターン化が有効であると考えられる。

実践　　実験計画書の作成（第３学年　理科「風やゴムで動かそう」）

予想や実験方法を互いにきき合う場を大切に、課題を解決するための学習方法の見通しをもつことができるように、実験計画書を作成した。学習課題、調べ方、予想を吟味する内容まででワークシートの半分を使い、時間をしっかり確保した。この段階でそれぞれの児童が見通しをもつことができていたため、途中で「先生、次って何したらええん？」ということが減り、主体的に学習活動を進めることができた。



２（児童質問紙）　友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができていますか。

指標　「①している＋②どちらかといえばしている」の合計

５月調査		11 月調査
90.5%	目標値 95.0% →	100%

指標の達成に向けた実践

（１）児童同士のつながり・分かち合いを促す支援の工夫

交流の場を効果的に設定したり、場に合った話型や話し方のコツを示したりする支援を行った。その際、交流することが児童にとってきき合う必要感を感じられるものであるかを考えることが重要である。そのことが、きくことのよさを感じ進んできこうとする児童の姿につながる。

実践１　ペアで「教えてタイム」の設定（第１学年　国語科「あひるのあくび」）

条件に沿って自分で詩を作ったあと、ペアの友達との「教えてタイム」を設けた。自分の作った詩はどうかききたい、友達はどんな詩を作ったのか知りたいなど、きき合う必要感をもたせるようにした。作った詩の発表だけに終わらないよう、ワークシートの裏にきき合いの話型を示したので、それに沿ってやり取りをし、それぞれの詩を完成させることができた。慣れてくると、話型を見なくても使えるようになり、活発な交流ができるようになってきた。

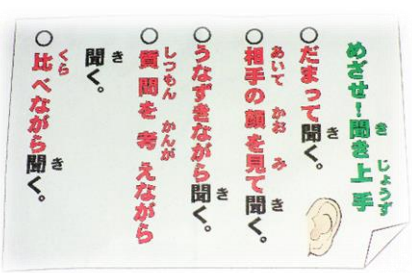
実践２　きく必要感をもったグループ交流（第６学年　社会科「大陸に学んだ国づくり」）

４～５人のグループで、聖徳太子の行った４つの政策を一人ずつ分担して調べ、その後各自が調べたことを伝える場を設けた。４つのうち、自分は１つの政策の意図しか分からないため、他の政策についてきき、理解する必要がある。さらに聖徳太子のめざした国づくりについてグループで考える場をもち、「どうしてこの政策をしようと思ったのだろう」「意図も知りたいな」と意見をききたくなるように仕組んだことで、能動的にきくことができた。

（２）児童が話をきくことができる環境づくりの工夫

児童がいつも「きく」ことを意識することができるように、全学級の教室の前面に、よいきき方を示したポスターを掲示したり、授業中の発言の話型を示したりして教室環境を整えている。

他にも、教科の特性に合わせて、きく観点や具体的なきき方を示している。例えば音楽では、鑑賞の観点を「音楽のもと」としてカードにして掲示したり、外国語では、英語での相槌や反応の仕方などをきき方として掲示したりしている。また、授業中だけでなく朝の会で友達のスピーチをきくときなどにも、分からないことをたずねることができるよう、きき方を掲示して意識づけをしている。



３（児童質問紙）　学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標　　「①できている＋②どちらかというとできている」の合計

５月調査 80.1% → 目標値 90.0% → 11 月調査 84.3%

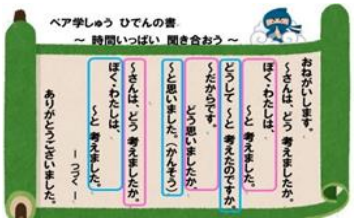
指標の達成に向けた実践

授業改善の視点を日常化する校内研修の工夫

〇６月９日　　第２学年　算数科「図を使って考えよう（１）」

コミュニケーションの基本は１対１と考え、低学年では、つながり・分かち合いを促す支援として、「ペア学習ひでんの書」を用い、具体的に話型を示して、相手の考えを受け止めながらきき返すことができるようにした。それにより、きくポイントが明確になり、ペアでのきき合いを行うことができた。さらにきき合いを活性化させるには、交流の必然性を高めることが大切であることが分かった。

また、全体のきき合いでは、教師の日常のきき方が児童のよいモデルとなっていたことから、教師自身のきく力の向上や、支持的風土のある学級づくりの大切さについて共通理解することができた。

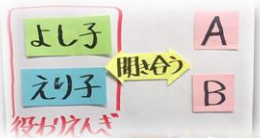


交流の必然性を高める

〇９月 15 日　　第５学年　道徳科「相手の立場を考えて（すれちがい）」

先の研究授業を受け、交流の必然性を高めることを意識して実践を行った。一人一人にきく必然性が生じるように、役割演技を客観的にきく第三者の立場を設けた。演技後、第三者が感想を伝えたり質問をしたりすることで、発言の意図や思いをきき合うことができた。役割演技を行う児童も行わない児童も、双方にきくという必然性をもたせることで、きく力を高めながら多面的・多角的に考えることにつながった。

全体のきき合いでも、代表児童の役割演技を見ていた児童から、自分事として考えている発言が聞かれた。一方、友達の意見がきけるようになってきたことで、相手の考えに流される児童が出てきた。



〇10 月 27 日　　第４学年　国語科「読んで考えたことを伝え合おう（ごんぎつね）」

先の研究授業から見えてきた、児童同士の問いかけを増やすことで、自分の意見をもって相手の考えを分かろうとする態度を養うことができないか、という課題の解決に向けて実践を行った。本時は、心情曲線を用い、それをホワイトボードに並べることで、互いの考えが視覚的に捉えられるようにすると、「どうして〇〇さんは、最後に下がっているの。」と理由をたずねるなど、きき合う姿が見られた。

全体のきき合いでも、取り上げたグループの曲線を見て、「この部分で変化していますが、どうしてそう考えたのですか。」ときいたり、友達の発言に対して「〇〇さんに質問です」と問いかけたりすることを重ねながら、きき合い、考えを伝え合う活発な交流が行われた。「なぜ」を問い合う「きく」には、児童同士をつなぐファシリテーターとしての教師の役割が大切だということも改めて分かった。

児童による
問いかけを増やす

◆特徴的な取組

（１）　「きく力」を高める活動

２週間に１回のペースで、教科学習や学級活動の時間から 20 分程度を活用し、学習指導を支える児童の「きく力」を高める活動を全校で行っている。児童が話型や形式に捕らわれることなく、生き生きと自分の言葉で語り、楽しくきき合う姿を目指して始めた取り組みである。この活動は、話すことへの抵抗をなくすことや、温かくきき合える学級の人間関係をつくることに役立っている。

活動例１　聞き出そう！好きなもの

相手の好きなものを、速くたくさん聞き出すゲーム。答える人は、「はい」か「いいえ」だけで答える。たくさん聞き出すためには、相手のことを考えなければならない。「はい」や「いいえ」だけで答えられる質問があることや、相手のことを考えて、答えやすい質問をすることが大切であることを意識させて行った。

ぼくは果物が好きだけど、
〇〇くんはどうかな？

はい！

りんごは好きですか？

みかんは好きですか？

計算が得意って言ってたな。
よく外遊びをしているな。

算数は好きですか？

おにごっこは好きですか？

活動例２　「イエス」「ノー」ゲーム

相手の思い浮かべた動物をあてるゲーム。質問に答える人は「イエス」か「ノー」だけで答える。質問を通して、「情報のレベル」への意識を養っていくトレーニングになる。質問をするときは、細かいことから尋ねるのではなく、大きな範囲から尋ねるとよいことに気付き、質問を工夫する必要がある。「ゾウですか？」「キリンですか？」と名前を言ってもなかなか当たらない。繰り返し活動に取り組むことで、「何」「どこ」「どんな」など５W１H を使ってきくことができるようになっていった。

＜これまでに取り組んだ「きく力」を高める活動の例＞

- ほめ言葉のシャワー（一人一人のよいところを見つけ合い、伝え合う活動）
- じゃんけんトーク（相手を見つけじゃんけんをして、質問をし合う活動）
- なかよししつもんゲーム（グループの中の１人に、他の児童が次々質問をする活動）
- ネームトーク（教師の呼名に「はい！」と返事をする活動）
- タイムトーク（決められた時間の中で、全員が一言ずつ発言する活動）
- オウムトーク（教師の言った言葉を同じように繰り返して言う活動）
- 上下左右トーク（教師の「上下左右」の指示に合わせて、マス目を指で押さえる活動）
- 伝言トーク（友達の話をしっかり聞いて再話する活動）
- しりとりトーク（全員でしりとりをして、それを振り返る活動）
- さかさトーク（教師や友達が言った文字や数字を逆の順番でいう活動）　　など

（２） 加配教員活用による少人数学級編成

１年生では、今回の「個を活かす協働的な学びの推進」の研究に関わる教員の加配を活用し、25 名以下の少人数学級編成を行った。そのことによって、ゆとりある学習環境の中で、一人一人の児童との関わりがより深くなり、話をきく素地を育てることにもつながるきめ細やかな指導を行うことにつながっている。

① 学級編成の状況

標準による学級編成		加配活用による少人数学級編成	
学級名	児童数	学級名	児童数
東組	34 名	東組	22 名
西組	33 名	中組	22 名
		西組	23 名

② 成果の概要

「きく力」の育成の視点から　―児童同士のつながり・分かち合いを促す支援―

話をきく
素地づくり

入学当初からの実態として、自分の思いを話したい、きいてほしいという思いが先行して、教師や友達の話を最後まできくことが苦手な児童がいることが課題であった。ペア学習の手引きとして「ひでんの書」を使って、まず相手の考えをきくこと、きいたら「どうして」とたずねることを繰り返し練習するようにした。また、課題解決の過程で、「友達の考えが知りたい」「友達にきいてみたい」という場を意図的に設定することで、きく必要感を感じられるよう工夫するようにした。児童アンケートでは、「友達の話を話し手を見て最後まで、一生懸命聞くことができた」と感じている児童は 90%、また「ペアやグループでの話し合い活動に自分から積極的に参加できた」と感じている児童は 81%だった。きくことのよさに気付き、進んできこうとする態度が身に付いてきている。

学習指導においては、教師が児童を一人一人を見取り、それぞれが自分の考えをもって友達と課題解決に取り組むことができるように支援を行うことで、きき合いが生まれ、協働的な学びの充実につながっている。

児童の学校生活及び教職員の観点から

〇幼稚園・こども園との滑らかな接続

67 名の児童について、３人の担任が機を捉えて児童の実態を情報交換し、学年全体や個別の支援について話し合うことで、児童にとって「段差」となることを軽減できた。７月の保護者アンケートでは、「お子様は『学校が楽しい』と感じていると思いますか。」という質問に対する肯定的な回答が 97%を超えており、環境が変わったことからの不安や戸惑いをほとんど感じることなく、小学校生活をスタートさせることができたといえる。

〇自己肯定感や支持的風土を育む学級経営

少人数であるからこそ、日直や給食などの当番活動では次々と順番が回り、友達の前に立って話したり、クラスのための仕事をして責任を果たしたりする経験を多くすることができる。一人一役の学級の係活動でも、それぞれの役割が大きく、毎日張り切って仕事をしている児童の姿が見られた。

また、学習意欲と学力の向上や、人材増員によるチーム力及び指導力の向上の面においても、アンケートや学力調査の結果、児童の生活や学習の姿から、成果が見られた。

Ⅳ　研究の成果と課題

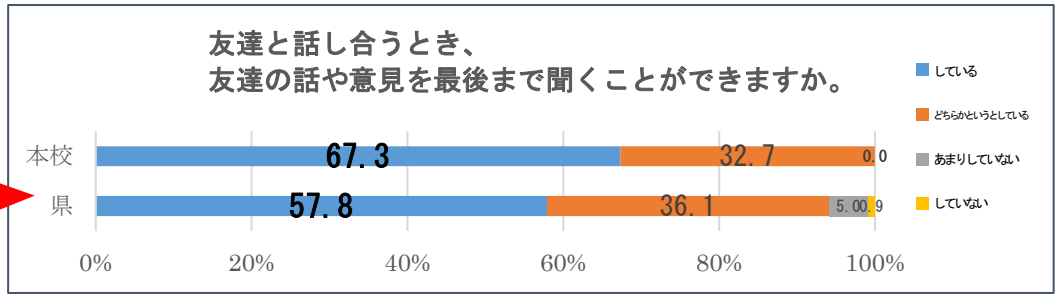
＜成果＞

○　提案授業で前回の成果を取り入れ、課題を解決するという、チームによる連続性のある研究実践を積み重ねたことで、研究テーマに迫るために意識した授業づくりを日常的に行うことができた。また、これらの提案授業では、香川大学准教授の清水顕人先生に続けてご指導をいただき、研究がより深まった。

○　児童同士のつながり・分かち合いを促す支援に重点をおいて授業づくりを行った結果、３つの「きく」の中でも、質問や問いかけを行いながら深い意味や背景を探っていくきき方（訊く）をする児童の姿が見られるようになり、今年度の県学習状況調査・児童質問紙における「きく」ことに関する項目から、県平均を上回る回答が得られた。

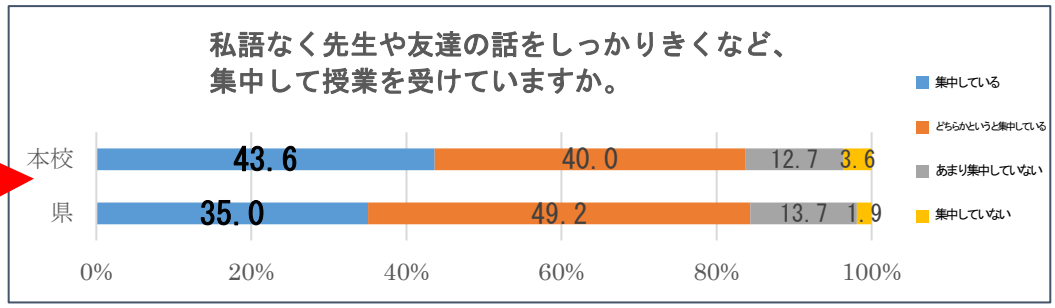
「している」と回答した割合

県平均　＋９．５



「集中している」と回答した割合

県平均　＋８．６



(R3 県学習状況調査)

○　６月と 11 月に実施した教職員の意識調査の結果からは、「授業中、児童の発言時間を確保している」「児童同士のつながり・分かち合いを促す支援を意識して行っている」と答えた教員の割合が増えており、授業づくりに向かう意識の変化が見られた。

＜課題＞

●　きき合う必然性がある活動の中で、質問や問いかけを行いながら学習を広げたり深めたりし、相互理解を深めたり、新たな考えを生み出したりするために児童同士がきき、これらをふり返る中で新たな気付きが生まれるような授業づくりを行い、児童一人一人が「わかる・できる」を実感できるような支援について探究する。

→　きき合いを通して学んだことをふり返ることで、きき合いのよさを実感できるようにする。
（最初は視点を明示的にし、次第に視点が児童の中へ）

●　研究によって教師のめざす子ども像（きくことのよさを感じ、進んできこうとする子ども）が、児童にとっての「こうなりたい自分」となり、児童の言葉で児童と共有されるようにしていく。来年度は、「伝え合い」をテーマにさらに深く、きくことについての研究を進めていく。

●　本校では、これまでも低学年で少人数学級編成を行ってきた。そのことが、中高学年の「きく力」の育成につながっていると考えられることから、この指導体制を継続していくことが望まれる。